

昭和50年度 和歌山県名匠

とう 【灯ろうづくり】

わか ばやし つね た ろう
若 林 常 太 良

(号 常盤)
じょうばん

【現住所】貴志川町（現：紀の川市）

【生年】明治16年

職 歴

15才でこの道に入り、高野山をはじめ、県内各地の寺社の灯ろうや仏壇、門などの飾り金、樋の角飾りを作り続けてきた。

業績の概要

神社や寺の銅製灯ろうを作り続けて70余年、その伝統を守りながら新しい考案などもしている。

15才の時、和泉市の田中安兵衛氏に師事し、約4年修業の後自営したが、氏は趣味が広く写真や生花をたしなみ、花は師範、写真は写真機を自作し、灯ろうや角飾りなどを写して研究を続けるとともに、高野山の常喜院、海南市の宇賀部神社、大神神社などに灯ろうを奉納した。

最近、仏教が世界の成り立ちをのべた「空・風・火・水・土」を表現した灯ろうを考案し、常盤形と名付けその製作に精魂を傾けている。特に屋根は関東方面の美しい屋形からヒントを得ている。

この美しさと精巧さが認められ、昭和50年には貴志川町（現：紀の川市）の無形文化財の指定を受けている。

後継者もなく、おそらく県内ではこの人のみであるので二代目の養成が望まれる。